

令和 8 年度(2026 年度)
模擬患者と連携した、チームによるがん患者の意思決定支援演習(SP 演習)

がん患者とのコミュニケーションの問題点・オンコロジーチームの課題を各職種立場から議論し、SPを含んだロールプレイを行うことで、がん患者とのより良いコミュニケーションを築くために必要なスキルを習得し、がん診療におけるチーム医療のあるべき姿を学習する。

1. 到達目標

- ①がん診療におけるチーム医療の現状の課題や必要性を理解しチーム医療の理想像を展望する
- ②がん診療におけるコミュニケーションスキルの重要性を理解し習得する
- ③がん患者のニーズに沿った最新医療を提供するための
 - ・オンコロジーチームにおけるがん診療医師の役割と機能を理解する
 - ・オンコロジーチームにおけるがん看護専門看護師の役割と機能を理解する
 - ・オンコロジーチームにおける理学療法士の役割と機能を理解する
 - ・オンコロジーチームにおける言語聴覚士の役割と機能を理解する

2. 日時

・演習日 2026 年 8 月 29 日(土) (10:00～17:20)

3. 場所

アットビジネスセンター大阪梅田 903・906 号室

〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地 2-2-16 関電不動産西梅田ビル 9F

アクセス : <https://abc-kaigishitsu.com/osaka/umeda/access.html>

※ 直接 9F へお越しください。

4. 実施方法

- 1) 参加学生の構成:医師:3 名、看護師 2 名、理学療法士 1 名、言語聴覚士 1 名、
 - 2) 他己紹介・事前討論は Zoom による Web Meeting 方式
 - 3) 自由討論・総合討論・ロールプレイは対面式
- SPさんが患者役(ロールプレイの実施時間は 25 分/1 ケース)

<事前学習> (学生レポート提出あり)

1. e-learning の視聴

・「多職種連携におけるチーム医療」 大阪公立大学医学部附属病院 看護部 鶴田理恵 先生

2. 今回のシナリオは、化学療法の終了と緩和ケアへの移行について等です。

治療や方針の意思決定において、各職種がどのようにかわるのが良いか、また、各職種でのコミュニケーションの特徴、強み、弱みを考え、如何にして多職種でチームワークできるかを上記 e-learning や推薦図書などを参考に事前に検討し、問題点をまとめてレポート(A4 版 1 枚程度)を作成し提出してください

※ 提出期限： 8 月 24 日 (月)

※ 推薦図書「がん医療におけるコミュニケーションスキル」出版社：医学書院 編集：内富 庸介

<事前討論> ZOOM 開催

実施日時： 2026 年 8 月 4 日 (火) 18:30~19:40(70分)

テーマ：「ロールプレイのシナリオについて」

(ロールプレイ演習に向けて、シナリオの理解を深める・学生間の役割分担の確認)

<事後学習> (学生レポート提出あり)

多職種連携におけるチーム医療についての課題と今回の演習から学んだことをまとめてレポート (A4 版 1 枚程度)を作成し提出してください。

※ 提出期限： 9 月 16 日 (水)

<レポート提出先>

事前学習・事後学習、共にレポートは近畿大学がんプロ事務局へご提出ください。

近畿大学医学部・看護学部・病院運営本部・医学部学生センター
がんプロ事務局

〒590-0197 堺市南区三原台 1 丁 14 番 1 号

TEL: 072-288-6866(直通) / Email: ganpro@med.kindai.ac.jp

< 実施報告 >

R8年度(2026年度)模擬患者と連携した、
チームによるがん患者の医師決定支援演習(SP演習)

内 容	日 時
事前討論会(ZOOM形式)	2026年8月 4日(火)
SP演習(対面形式)	2026年8月29日(土)

参 加 者	人 数
がんプロ院 生	7 人
教 員	9 人
S P	4 人
合 計	20 人

見学者2名

がんプロ院生・職種内訳	人 数
医 師	3 人
看 護 師	3 人
理 学 療 法 士	1 人
言 語 聴 覚 士	1 人
合 計	14 人

< 受講生の声 >

■ 医師

演習終了後のフィードバックでは、SP から「医師と一緒に落ち込んでいってしまい、本当は前を向けるような言葉がほしかった」、教員からは、「すべての質問に一つ一つ答えるだけでなく、対話全体を見据えるべきだ」との指摘を受けた。患者に共感しつつも医療者としての客観性を維持しつつ、安心感をもたらす姿勢が欠けていたと痛感した。

今回の演習を通して実感したのは、医療現場におけるコミュニケーションとは、単なる対人スキルではなく、多職種連携や患者支援をスムーズに機能させるためのツールでもあるという点である。協調的な姿勢や適切な対話を心がけ、今後もチーム医療を実践できる医師を目指していきたい。

■ 医師

今回の演習を通して、医師だけですべてを把握し対応することには限界があり、他職種だからこそ得られる患者の思いや生活上の情報があることを改めて認識した。今後は、各職種の専門性を理解して必要な情報を共有したうえで任せられる部分は任せ、そこで得られた情報を再びチームで共有することで、患者が真に求めているものを治療や支援に反映できるチーム医療を実践していきたい。

■ 理学療法士

今回の実習を通して、理学療法士として十分に実践できていない点や、今後取り組むべき課題を具体的に学ぶことができた。今後は、今回の実習で得た学びを一時的なものにせず、患者・家族の意向を継続的に確認するとともに、他職種との情報共有や連携を日々の臨床の中で実践していきたい。

■ 看護師

今後の課題は、1つ目が患者の表出した不安に回答するだけでなく、その背景にある認識、感情、価値観を捉え、患者が不安や希望を言語化できるように支援するコミュニケーション技術を高めることである。2つ目が、多職種間の円滑なコミュニケーションを通して、シームレスな関係を構築することである。職種、部署、療養場所が変わっても患者への支援が途切れないよう、情報共有の方法を継続的に見直し、多職種をつなぐ調整役を担うことが、今後の看護実践における課題である。

■ 看護師

悪い知らせを受けた患者に対しては、傾聴を中心としたコミュニケーションを重視しながらも、患者の思いやニーズを捉えることの重要性を学んだ。また、それらを多職種で共有し、各職種の役割を明確にしてチームで多角的に支援することが、それぞれの専門性を活かした質の高い医療につながると考える。今後は、患者を中心としたチーム医療を実践できるよう、患者との対話を大切にするとともに、多職種との建設的なコミュニケーションを積極的に図ることを心がけていきたい。

■ 言語聴覚士

演習後に SP（模擬患者）さんより、『「言語聴覚士」という職種を初めて聞いたけど、どんなことをする人かわかったよ』と、大変ありがたいフィードバックをいただいた。誤った情報を提供したことは反省だが、職種の専門性や、QOL を向上できる可能性があればそれを伝えることで患者さんやチームの安心に繋げる働き方がしたいと思えた。そのために自職種について知っておくこと、発信すること、どんな役割で関われるかの伝達、伝え方も含めて重要であると思われた。「今」できる気づきでこれからのチーム医療の可能性に繋げたい。

■ 医師

今回の症例を通して、治療選択肢が限られた進行がん患者に対する意思決定支援では、医学的に妥当な方針を提示するだけでは不十分であり、患者がその方針をどのように受け止め、今後どのように生きたいと考えているのかを理解することが重要であると学んだ。今後、自身が同様の場面に直面した際には「治療をするか、しないか」という二者択一の議論に終始するのではなく、患者が何を大切に生きたいのかをまず確認したい。その価値観を多職種で共有し、抗腫瘍治療が困難となった後も患者の希望を実現するために何ができるのかを一緒に考えることが、医師として重要な役割であると考えた。

< 実習風景 >

